

AED(自動体外式除細動器)の市民使用から20年を経て救命は進んでいるのか

日本赤十字社 参与 三井 俊介



2004年7月に医療機器であるAEDの市民使用が可能になって満20周年に当たる昨年2024(令和6)年、AED使用による救命実現を使命に掲げる「日本AED財団」が厚生労働省、総務省消防庁、関係団体と協同してシンポジウムやフォーラムを開催しました。筆者は、厚労省が2003年に設置した「非医療従事者による自動体外式除細動器(AED)の使用のあり方検討会」のメンバーとして、4回に亘る検討過程の真ただ中に居たことから、市民のAED使用解禁20周年という節目を感慨深い気持ちで眺めていました。検討会の到達ゴールは、市民がAEDを使用することが「医師法17条」に違反することには当たらないというコンセンサスを得ることでした。

検討会メンバーは、救命救急や麻酔科専門の医師、日本医師会と日本看護協会代表、法学部教授、新聞社の論説委員、航空会社の医師、市民向けに救命処置を普及している東京消防庁、日本赤十字社の担当などに加え、オブザーバーとして関係省庁の担当官で構成されていました。航空会社の委員からは社内客室乗務員への教育や機内配備の応急処置資器材、東京消防庁委員と筆者からは消防や日本赤十字社が開催している市民への講習内容/所要時間/年間実施回数/受講者人数等のプレゼンテーションを行い、市民による心肺機能停止傷病者への蘇生処置実施に向けた環境整備の現状を共有することになりました。

その後の議論の中では、市民によるAED使用の条件の一つとして講習受講を付すのか否(講習受講は不要)かが大きな争点になりました。筆者は講習受講必須を主張、不要主張派はAED使用のハードルを下げる必要がある、AEDが音声指示を出してくれるから小学生でも使えるという主張でした。

こういった両論に対して、検討会の最終結論は、反復使用をすることが想定し辛い一般市民には講習受講をmustとして課すことはせず、片

や警備員、トレーニングジムの指導者、教員、警察官等のAEDを使う可能性の高い職種に就いている方々には受講を義務付けるという結論を出しました。

この20年間での市民によるAED使用で救命された傷病者は約8千名と報告されています。これら奏効事例で、AEDを使用した市民が講習受講をしたことがあったのか?なかったのか?については(残念ながら)分かりません。しかし、奏効事例の報道において、取材者がAED使用市民に対し使用動機を聞いてみると、学校の授業や〇〇の主催講習で習ったからという声を聞く限り、講習の受講経験は貴重なものだと感じます。

最後に、総務省消防庁が本年(令和7年)1月に発行した「救急・救助の現況」によれば、一昨年(令和5年)1月～12月の一年間で『一般市民が目撃した心原性心肺機能停止傷病者のうち、一般市民による除細動実施の有無別生存率』が、一般市民により除細動が実施された傷病者の1ヵ月後生存率は54.2%、これに対して一般市民による除細動が実施されなかった傷病者(適応でなかった傷病者含む。)の1ヵ月後生存率は9.6%でした。

このことから、救急隊到着以前に、一般市民が迅速に心肺蘇生実施とAEDの使用に着手することが、救命に必要なことかがお分かりいただけることと思います。

練馬区水泳連盟が毎年開催している「区民公開講座兼水泳指導員養成講習」のプログラムの中には、「心肺蘇生とAEDを用いた電気ショック」という内容が入っています。訓練用人形の代用として空きペットボトルを、AEDの電極パッドの代用には使用済みはがきを用いるなどの工夫をすることで、気軽に多くの方々に参加してもらえるのではと思っています。

一人でも多くの方々が、講習を受けてくれますことを希いつつペンを置くこととします。

第18回ねりま幼児水泳大会

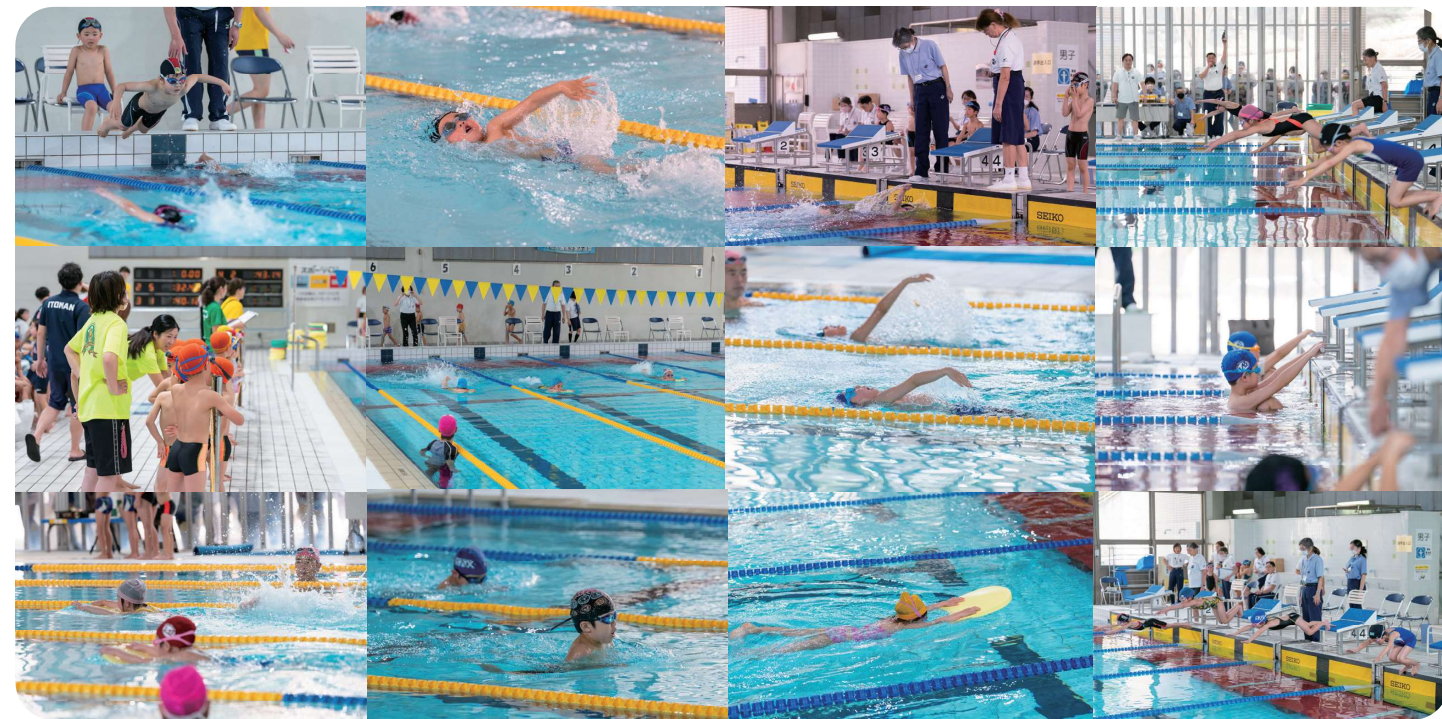
2025年3月9日(日)に練馬区立光が丘体育館プールにおいて、第18回ねりま幼児水泳大会が開催され、約200名(延人数)がエントリーされました。はじめての大会で緊張も見られましたが、皆さんとても元気よく泳ぐことができました。

<プログラム>

- ・100mリレー
- ・100m板キックリレー
- ・25m背面キック
- ・25m板キック
- ・25m、50m自由形
- ・25m、50m背泳ぎ
- ・25m、50m平泳ぎ
- ・25m、50mバタフライ
- ・100m個人メドレー
- ・100mメドレーリレー



開会式・選手宣誓



大会風景

泳力検定会

2025年3月16日(日)に大泉学園町体育館プールにおいて泳力検定会が開催されました。泳力検定とは、7級～1級までの各種目を日本水泳連盟競泳競技規則に違反しない泳ぎで基準タイム以内で完泳し、検定者に認められた者へ認定証と認定バッジを授与するものです。今回は6歳～66歳まで、延べ189名がエントリーし、各級にチャレンジされました。

泳力検定基準(日本水泳連盟 泳力検定基準表 による)

級	種目	基準
1級	200m個人メドレー	200m個人メドレーを標準記録以内で完泳
2級	100m個人メドレー	100m個人メドレーを標準記録以内で完泳
3級	4泳法50m	50mバタフライ、平泳ぎ、クロール、背泳ぎのうち1泳法
4級	4泳法25m	25mバタフライ、平泳ぎ、クロール、背泳ぎのうち1泳法
5級	4泳法25m	25mバタフライ、平泳ぎ、クロール、背泳ぎのうち1泳法
6級	4泳法25m	25mバタフライ、平泳ぎ、クロール、背泳ぎのうち1泳法
7級	4泳法25m	25mバタフライ、平泳ぎ、クロール、背泳ぎのうち1泳法

